第二十一組　第四回「推進員の集い」講話録

二〇一七年十二月四日　難波別院　堺支院にて

南無阿弥陀仏で本当に救われる？

お話

澤田（さわだ）　秀丸（ひでまる）　先生

第十二組　清澤寺（しょうたくじ）　前住職

三帰依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

三帰依文を唱和します。

はじめに

このたび、この研修会のご案内を丁寧にいただきました。それでこの「南無阿弥陀仏で本当に救われる?」というテーマを拝見したとき、私の頭にぱっと「疑問」という言葉が浮かびました。「疑」は疑う「問」は尋ねるです。初めは、このテーマは「疑い」じゃないのかと受け取りました。しかしこのテーマで、疑問の「問」の上に立ちますと「本当に救われる南無阿弥陀仏は何なのか」ということを尋ねる入口に立っていることになります。「疑」に立つのか「問」に立つのかで大きな違いが生まれるのです。このたびは、皆さんと一緒に、当然「問」の上に立ってこのテーマを考えてみたいと、こう思ってお伺いをしました。

「南無阿弥陀仏で本当に救われるのですか」と尋ねられたら、答えは一つなのです。私たちは南無阿弥陀仏でしか救われないのです。これが答えです。問いが出て答えが出たのですから今日のお話はこれで終わりになるのです。しかし、いただいた時間にまだちょっと余裕ありそうですので、じゃあなぜ「南無阿弥陀仏でしか救われないのか」ということ

を推進員の皆様と一緒に考えてみようかと思っています。

念仏というのは

私は三年前まで、北海道にある東本願寺の旭川別院という所に勤めておりました。旭川別院は七十年の歴史を持つ幼稚園を経営しています。別院の輪番はその幼稚園の理事長と園長を兼ねております。ある年、新年会に出席いたしました。型通りの会議を終えると、ホテルで丸いテーブルに十人ずつぐらい理事長・園長が座った新年会が始まりました。

隣の人とお話をしながら、心地よくお料理をよばれ、ほろよくお酒もいただいた時です。私の真正面に座ってらっしゃる男性の理事長さんから、「輪番先生」と大きな声を掛けられました。「輪番に先生はいらないのにな」と思いながら顔を向けますと、その方が「実は私も先生と同じ浄土真宗の門徒です。ですから毎朝お内仏の前に座ってお正信偈のお勤めをしています。そしてお寺からお勤めのご案内があったら、必ずと言っていいぐらいお参りをさせていただいています。ご法話も聞いています。しかし、この年になるまでどうもわからないことがあるのです」とおっしゃるのです。

「何ですか」と尋ねましたら「念仏というのは一体何なのですか」という質問でした。「毎

日念仏を称えているけれど、念仏が何なのかわからない」ということです。そうしましたら横に座られた先生が「そら先生、念仏って言うのは南無阿弥陀仏のことですよ」とこう答えられました。すると別の方がですね「いや私は御宗旨は違うけれども、前から南無阿弥陀仏はどんな意味を持っているのかを聞いてみたかった」とおっしゃるのです。

私は、まるで推進員の座談会のようだと思って聞いていました。しかし、場所が場所ですから黒板を持ってきてお話をするわけにはまいりません。そこで、まず初めの答えとして「南無阿弥陀仏は仏様のお名前です」とこう答えたのです。

そうしましたら私の正面で初めに質問された方が「いや私たちの仏さまのお名前は阿弥陀如来とお聞きしています。でも南無阿弥陀仏がお名前でしたら、あの仏様に二つのお名前があるのですか」とこう尋ねられたのです。

それで私は「いえ、あの蓮の上にお立ちになって、こう右手を上げて左手を下げられたあの仏様のお名前は、あくまで『阿弥陀如来』お一つです。二つはありません。けれどもその仏様の名前は私たちに届いて、私たちを動かしてくださるのです。その私たちを動かしてくださる『阿弥陀如来』のはたらきを『南無阿弥陀仏』とこう言うのです」と答えました。

ところがこのタイミングで、司会者の方から「ただいま市長さんがお見えになりました、

今からご挨拶をいただきます」と、ご案内がありました。隣の方は私にささやくように「市長の挨拶よりもこっちの方が大事だったのに」とこうおっしゃってくださったのですが、それっきりその話は終わってしまったのです。

しかし今日は、司会者の人が「ただいまから懇親会に移ります」とはおっしゃいませんので、しばらくはこの後のお話を続けて行こうかと思っています。

名のはたらき

旭川市に江丹別（えたんべつ）という場所があります。ここは日本一寒いところなのです。私が旭川におります間に、一度江丹別が氷点下三十一度になりました。それがテレビのニュースでは旭川が氷点下三十一度と報道されたのです。金沢におりました私の友人がそのニュースを見まして「これはえらいことや、澤田さん凍ってしまう」と、金沢のお酒を送ってくれたのです。澤田秀丸（さわだひでまる）は旭川を一歩も動いてないのです。じっとしているのです。それなのに私の名前が金沢まで届いていって、そして届くだけじゃなくて酒屋さんへ行ってお酒を送るという動きを、名前がしているのです。名前はこうして、もう留まるところなしに、はたらいて届くだけじゃなくて、その人を動かしていくのです。

念仏は南無阿弥陀仏と称えた「今」、私の「心」に南無阿弥陀仏が届いてくださいましたという「今心」＝「念」仏と書くのです。ですから念仏は阿弥陀如来様の中でじっとしているのではなくて、阿弥陀如来様のはたらきが必ず私たちの所に届いて、そしてはたらいてくださるのです。そのはたらいてくださる阿弥陀如来様のおはたらきを南無阿弥陀仏の念仏とこう言われたのです。

三つのはたらき

私にも、皆さんにもお名前はあります。お名前ということでは仏様も我々も同じです。我々についている名前は常に三つのはたらきをしているのです。

一つは昔から名は体を表すと言いますように、例えば澤田秀丸という名前は「どこに住んでる人でこういう人だ」と体を表すのです。ある時、奈良県のお寺のご法話に行きました。駅を降りてからそこのお寺までしばらく歩いて行きますと、私の前に二、三人女性の方がお数珠を持って歩いておられました。「これはお寺にお参りされる方やな」と思いながら、追い越そうかこのまま後ろついて行こうかと考えていたのです。そしたらその中の一人が大きな声で「今日のお説教は澤田秀丸さんやな」と言ったのです。そしたら隣の人が「あ

の人はな、寝たら怒る怖い人や」と言うのです。そしたらまた一人の人が「でも、私はあの人好きやで、なんでか言うたら大きな声で話をしてくれるからよう聞こえるんや」と言うのです。澤田秀丸という名前には、いっぱい引っ付いてくるのです。「名は体を表す」まずこれが一つです。

二つ目は、名は私と他人を結んでいくのです。皆さんも手紙が来た時に、一番に手紙の後ろやハガキの前を見て、名前を確かめるでしょ。今、この時期は「喪中で年賀状を御遠慮いたします」というハガキが来ますね。私の所にも、もう三十枚ぐらい来ているでしょうか。中にはね一月に父が亡くなりましたというハガキが来るのです。「一月に亡くなられたというのなら、もっと早く出してくれたらいいのに、もう年賀状を書いてしまったでないか」と思うような時もあるんですがね。でも、お名前を見て亡くなられたかと思うと寂しくなります。名は私と人を結び付けていくのです。

もう一つ、三つ目はですね、名は環境も背負っているのです。単なる名だけとは違うんです。その人の名は、まわりの物を背負っているのです。

可哀そうにね、私の息子はどこへ行きましても「あんた、あの澤田秀丸の息子か」と言

われます。どこへ行きましても私の息子には私という背後霊がついているのです。名は環境を背負うということです。もっとも最近は、逆さまになっています。長いこと大阪を留守にしておりましたので、久しぶりにご法話に行きますと「あなたの息子さんには大変お世話になっているのですよ」と、息子がこの頃私の背後霊になっているのです。

下の孫がよく言いました。学校へ行って嫌なことは、先生から「君がシュウトの弟か」と言われることだと。「僕は僕」とものすごく怒っていましたね。

しかし、どうしても名は環境を背負うのです。誰の弟か誰の息子かという環境を背負うのですね。澤田秀丸という場合には日本人という環境も背負っているのです。

全ての名は、たくさんのはたらきを背負って私たちに届いています。南無阿弥陀仏というお念仏も、阿弥陀如来様の一切のはたらきを込めて私たちの所に届いて来てくださっているのです。

お念仏の解釈

じゃあ南無阿弥陀仏とはどういう意味なのかということを確かめたくなります。

お念仏の解釈をすることは、本当は慎まなければならないのですが、このことを抜いて

お話しするといつまでも分からないままになります。

南無阿弥陀仏と言いますのは、これは中国の念仏者が作り出した言葉なんです。だから漢字で書いてあるのです。でも、中国の念仏者が勝手に作り出したのかというとそうじゃないのです。これはちゃんとお釈迦様の説かれた教えの中にある言葉なのです。

まず、「南無」というのはナマスという言葉です。インドの字でナマスと書くんです。またはナモとも言われます。それを中国の人はそのまま漢字に直して「南無」と書いたんです。ですから、この「南無」という漢字には何も意味がないのです。

今は住職をしている私の息子は、一九六八年生まれですからもう四十九です。その息子と小学校入学式のその日から、毎朝本堂で一緒に座ってお勤めをしました。息子はお勤めが終わってからご飯を頂いて学校へ行くという生活を、毎朝六年間ずっと続けたのです。その日も本を開いてお勤めをしておりましたら、息子が「お父さん、これ南が無いってたくさん書いてあるけれど、なんで南が無いんや。南が無かったら北ばっかりか」と質問してくるのです。これは南無という字を見ているからです。この字には何も意味はないのです。これはナマスというインドの言葉を言えるように字を当てはめただけなのです。

ところが親鸞聖人はこれをわかるように「『南無（なむ）』の言は帰命（きみょう）なり」とこう解釈されたのです。「ナマス」というインドの言葉は、意味のある言葉に直すと「帰命」という言葉にな

るのです。この時の「命」というのは「いのち」の意味ではなくて、命令の「命（めい）」であって、「仰（おお）せ」という意味です。「帰」は帰る。帰るは「帰順（きじゅん）」ですから従うということです。「帰命」は仰せに従うという意味なのです。だから阿弥陀様の前で仰せに従いますと頭を下げたのが「南無」という言葉になるのです。

ちょっと難しいのですが推進員の皆さんですから、あえてこの言葉を黒板に書きます。

「南無」の言（ごん）は帰命なり。「帰命」は本願招喚（ほんがんしょうかん）の勅命（ちょくめい）なり。

親鸞さまは「『南無』の言は帰命なり」とおっしゃるのです。ナマス（南無）というのは帰命という意味なんです。じゃあ「帰命」とは何かというと「本願招喚（ほんがんしょうかん）の勅命（ちょくめい）」である、とこうおっしゃるのです。

本願というと阿弥陀如来が私たちにかけてくださった願いです。「これよりほかに幸せはありませんよ」と、かけてくださった願いです。その願いに阿弥陀如来様は「手で召いて（招）」「大きな声を口に出して（喚）」私たちに伝えて下さっているのです。

その仰せに従うのです。だから帰命の命は仰せ、それが南無という意味なんです。南無と頭を下げたときに私たちは「阿弥陀如来様の仰せに従わさせていただきます」というこ

とになります。

アミタ（阿弥陀）もインドの言葉なんです。これはアミターユスという言葉とアミターバーという言葉が一つになっているのです。アミタは無量という意味なのです。

仏教で「ア」が付いたら「無い」という意味だと思ってください。阿修羅（あしゅら）というでしょ、阿修羅を一般の新聞では仏さまと言っていますが、本当は仏教を守る神さまなのです。阿修羅の阿（ア）は「無い」ですから、修羅では無いということです。修羅というのは争うですから、阿修羅は争う心が無くなったということです。阿弥陀のアは無い、ミタは量、アミターユスは寿（いのち）、アミターバーは光、そうすると阿弥陀という仏様は無量寿と無量光を背負っておいでになるのです。これが阿弥陀如来様なんです。

なぜいのちを奪ってはいけないのか

このときの「寿（いのち）」、無量寿というのが問題です。最近は「いのちを大切に」とか、何であれ「いのち」という言葉がたくさん使われているのを目にしますね。大阪教区の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマは「いのち輝け！」でしたでしょ。

自分のことで恐縮ですが、私が若い時には、真宗大谷派の仏教青年会という全国組織の

活動が非常に活発だったのです。北海道から九州まで、お寺に若い人が集まって仏法を聞くという会です。この仏教青年会の全国連盟の委員長を私がしました。三十歳の時です。ですから、よく北海道にも九州にも行きました。

そのときに仏教青年会の独自のスローガンを作ろうということになりました。今はすぐスローガンを作りますが、その時分はあまりスローガンとか言わなかったのです。それでも、これが仏教青年会だというスローガンを作ろうということになりまして、その時に作ったのが「いのちの花一輪、いつも確かに咲かせていたい」というスローガンです。これ、私は今も使っています。五十一年前、もう半世紀前のスローガンですけれど、今でもちゃんとそうだなと思うのです。これが大谷派のスローガンの始まりです。その後でいっぱい出てきて、もう何時にどれが出来たのか最近わからないようになっていますね。

今、校長先生で「いのちを大切に」とおっしゃらない方はいないと思います。ただ、その「いのち」とは何をおっしゃっているのでしょう。一度それを聞いてみたいのです。何を大切にしなさいと子どもたちにおっしゃっているのでしょうか。うっかりすると「動いている心臓を止めたらいかんぞ、呼吸を止めたらいかんぞ」、言い換えれば「人を殺したらいかんぞ」という意味の「いのちを大切に」だと思うのです。

なぜ、人を殺めてはいけないのか。仏教で説かれる、人間が人間らしい生活を失ってしまう十の行ってはいけないことがあります。これを十悪と言います。その一番は、殺生、殺してはいけないです。これはいのちを奪うことです。たぶん校長先生はそうおっしゃってるのだと思います。いのちを奪ってはいけないと。

じゃあ、なぜいのちを奪ってはいけないのか、なぜそれほど人間のいのちは大事なのか。相模原市の障がい者施設を襲った人が言っていたでしょ。「こういう人たちはもう生きていないほうがいいんだ」と。では「なぜ、全ての人のいのちは同じように大事なのですか？」と問われたらどうします。すぐに答えられますか。

なぜ殺してはいけないのか、なぜ殺生はいけないのか。これは、その人に必ず「寿なる」いのちがあるからです。これは何かというと価値、値打ちです。その人にはその人の値打ちがあるんです。

例えば昔から石には石のいのちがあるというじゃないですか。じゃあ石のいのちって何ですか。石に心臓があるのですか。そういういのちじゃないですね、ここでいうのは「寿なる」いのちです。では、石の「寿なる」いのち、価値、値打ちは何ですかと問えば、それは重さです。石のいのちは重さです。この石は綺麗な色なんですっていうのはその人の思いです。綺麗な石を愛でて、そうでない石をバアンと河原に投げつける。これは差別に

つながるのです。「この石の恰好がいいじゃないですか」と床の間に置いてる人がいますね。じゃあ恰好の悪い石には値打ちがないのですか、ということになります。格好がいいとか悪いとかは私の思いが決めます。ここに差別が生まれるのです。

石の値打ちは重さなんです。そう考えたら、漬物の石を大切にするおばあちゃんが、一番石のいのちを尊んでいるのかもしれません。あるいは、お葬式で偽の作った石を持って来て水車を回したりするでしょ。あれなんて哀れなもの、愚かなもの、必要のないものと皆さんつくづく思いませんか。石の値打ちのない空っぽの石を置いて立派なお葬式が出来ましたと、どうしていえるのでしょうか。

価値がわかると本物と偽物がわかってくるのです。全てのものに価値がある。無量ですからね。全部のものに価値があるのです。われわれが捨てているものにも全部価値はあるのです。その価値こそがいのちなのです。

リュウ君おはよう

私は、旭川別院に六年間いましたが、その前は京都の岡崎別院というところで二年間、その前は大阪の茨木別院に六年間勤めていました。この茨木別院は、幼稚園と保育園を両

方経営しているのです。

あるときに市役所の担当の方がこられましてね、お母さんの産休が終わった子どもを一人預かってもらえないかということでした。それでお話を聞いたら、その子はお母さんのおなかの中にいる間に目を患(わずら)って、緑内障でオギャーと生まれたときには全盲、まったく見えない状態でした。生まれてから専門の先生が看られても、もう回復する見込みはなく一生盲目の子です。その子どもを預かってほしいと来られたのです。

私が一人で「はいはい分かりました」というわけにも行きませんから、さっそく職員会議を開いて保育園の先生も幼稚園の先生も全部集まってもらい、引き受けるかどうかを論議してもらいました。私が出席すると、先生方が発言しにくくなると思いお寺で待っていました。

三時間後に職員がやってきました。「今まで話し合ったのですが丁度意見が二つに分かれました。引き受けようという人と、何の準備もないのに引き受けて大丈夫か、一年くらい置いたらどうかという意見の二つです。これ以上は園長先生に一任します。」と言ってきたのです。それで私はもう腹は決めていましたので、即座に「引き受けましょう。この子を一人前にして初めてここの保育園が一人前になるんです。この子を断ったら一生ここの保育園は一人前になれません。だから努力しましょう」と言ったのです。

その子は、下の名前をリュウ君と言います。私は気になるものですから毎日教室へ見に行きました。よちよちと歩くくらいになったときです。一番教室の奥で一人で積み木で遊んでいました。それで私は入り口に立って「リュウ君おはよう」と言ったのです。そしたら、びっくりしました。入口に立っている私に、ちゃんと顔を向けるのです。普通だったら声がすると「あ、どこから言ってるのかな」と、一度顔をあげてキョロキョロするのです。だけどリュウ君は、ちゃんと私の方へまっすぐ顔を向けるのです。目が見えなくなると他の感覚が鋭くなるのですね。それをリュウ君は自分の中で、ちゃんともう育てているのです。

そしてリュウ君は、「あ、園長先生や」と、私の方へ歩いて来ます。その時に私はもう一つびっくりしました。同じような年ごろの子どもが二、三人まわりにいたのですが、その子たちが歩いてくるリュウ君の前にあるオモチャを、パッと這(はっ)って行ってどけてあげるのです。

私はこれを見て感動しました。子どもたちは、どうしたらリュウ君を助けることができるのかをちゃんと知っているのです。我々はそういう人をみると、可哀想に、気の毒に、という気持ちばかりが湧いてきますが、これは絶対いけない気持ちなのです。なぜなら可哀想にとか気の毒にとは、相手を見下げているじゃないですか。

残念ながら我々にできるのはせいぜいこの見下げる気持ちを持つ程度です。だけどリュウ君のまわりの子どもはもう理屈じゃないのです。目が見えない子が歩いていたら、何をするのがその子を助けることになるのかをちゃんと知っているのです。そして、そういうことを教えてくれているのがリュウ君なのです。全盲の子には全盲のすばらしい値打ちがある。だからまわりの子どもたちも見下げないのです。ですから、こんな子供はいらないのだとは絶対に言えないのですね。

リュウ君は、今、中学校へ行ってます。私は別院を辞めてから会ってないのですが、最近、住所がわかりましてね。会えるようにいま連絡をしてくれているのです。会うのが楽しみですね。一番に言ってみようと思っているのです。「リュウ君」って。そしたら「園長先生や」て答えてくれるかもしれないです。私の声を覚えてくれているでしょうか。

老人には老人の価値がある

全盲の子には全盲の素晴らしい値打ちがあるんです。一切のものに値打ちがあるのです。それを我々は、あれはいいけどこれはいらない。こっちは値打ちがあるけど、こっちは値打ちがないと値踏みしているのでしょう。そういうことを平気で行なっているのです。

その私の心を照らし出してくださるのが阿弥陀如来様の光。私の愚かな心を照らし出して、本当に尊いものはここにあるのですよ、いのちを支えている「いのち」、いのちをいのちたらしめている「いのち」を示してくださいます。

そう思ったら、老人には老人の価値があるのです。そりゃ、体力は劣ります。でも堂々としていればいいのです。身体障がいの子どもにも価値がある。一切のものに価値がある。ですから我々は先ず、老人の価値とは何かそれをしっかりと阿弥陀如来様の光に照らし出されて受け止めていくことが大事なのです。

逆に、私たちから念仏を取り上げてしまったらどういう生活になるのでしょうか。年を取ったからと卑下して、うっかりしたらもう早く死んだほうがましだと人生捨ててしまったりします。ところが自分が年取って愚かになりながら、障がいがある人を「可哀想に、気の毒に」と見下げてしまう。ひょっとしたら、もうすでにそういう非常に人間性を失った老人になっているのかもしれません。そういう私たちに、南無阿弥陀仏のお念仏は、私の中に届いて、大切なものを教えてくださっているのです。

だから歩けなくなってもお念仏を頂いたらいいのです。お寺に参れない体でもお念仏を頂いたらいいのです。そしたらいろんな喜びが私に届いてくる。だから念仏でしか救われないのです。

これが、このたびのテーマであります。今日はここでお話を終わりますが本当はこの後、いのちとは何なのかということをまだお話しなくちゃいけない、本当は続いていくのです。しかし、四十分というご案内をいただいていますので、一応ここで終わろうと思います。

合掌

本書は、2017年12月4日に難波別院堺支院（堺南御坊）で開催された「第4回　第21組 推進員の集い」の澤田秀丸先生のお話をまとめたものです。

この「推進員の集い」を開催するにあたっては、当検討会の推進員と住職で何度も打ち合わせを行いました。

その結果、日頃お念仏を申しながらも、ふと頭をよぎる「南無阿弥陀仏で本当に救われる？」という、正直な疑問を先生にお伺いすることにしました。

先生は、まるでお念仏を疑うかのような私たちの問いに対し、丁寧に順を追ってお念仏によって救われる事実を教えてくださいました。それは、決して堅苦しいものではなく、楽しくそして力強く、全てが先生が生活の上で気がつかれた具体的な仏様のおはたらきそのものでした。

そこで、このたびの先生のお話を少しでも多くの方と分かち合いたく冊子として取りまとめました。

最後になりましたが、本書の発行に御快諾いただきました澤田秀丸先生に深甚の謝意を申し上げます。

2018年10月1日

推進員の活動に関する検討会

南無阿弥陀仏で本当に救われる？

２０１８年１０月１日　初版発行

講　　述　　澤田　秀丸

発行編集　　大阪教区第２１組教化委員会
「推進員の活動に関する検討会」
事務局　〒593-8312
堺市西区草部７９
真宗大谷派大阪教区第２１組以速寺

組版・デザイン　Tatsumaro Yamao

澤田（さわだ）　秀丸（ひでまる）　師

1934 年　大阪府生まれ。

真宗大谷派仏教青年会連盟全国委員長、宗務所出版部長

山陽教区教務所長、姫路船場別院・広島別院・茨木別院・岡崎別院・旭川別院輪番、同朋会館・総会所教導、大谷婦人会本部事務局長を歴任。教誨師。真宗大谷派清澤寺前住職

真宗大谷派　大阪教区第 21 組教化委員会
推進員の活動に関する検討会